アナザー・スカイ

崎浦和希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アナザー・スカイ

【Ｎコード】
Ｎ０６１６Ｊ

【作者名】
崎浦和希

【あらすじ】
小国ながら類まれなる豊かさを誇るとある王国。その豊穣を支える神殿で神子を務めるアイリスは、心に満たされないものを抱えながらも時に流されるまま生きていた。
ある日、唯一の拠り所としていた丘の上で、ひとりの青年に会うまでは。
※以前掲載していたものをプロットから改稿しての再スタートです。
よろしくお願いします。

Prologue

風の声が、聞こえる。

びゅうびゅうと吹く風に肌をさらして、わたしは丘の上にいた。
ここは、わたしのただひとつ好きな場所。
五年が経っても相変わらず好きになれない墨を流したような景色だが、草が強く吹く風に揺らぎ沈んでゆく陽光にきらめくさまは、ふとした拍子に眠ってしまいそうになるわたしの心を動かした。なにもかも墨色をした世界のなかで、この丘だけ唯一うつくしい。ここから見える草原はきらきらと、白と黒という限られた色彩のなかゆるされるかぎり美しく波打ってみせる。それが好きだった。
それに、ここにいればとても安らぐ。
五年間、ほとんど毎日訪れているのだけれども、ここにわたし以外の誰かがやってきたのを見たことはない。丘の隣には深い森が広がっていて、神聖な場所と言われているとともに、そういった場所につきものの不気味さを人々に与えるらしい。
常に人目にさらされるわたしにとっては、だれもわたしを見ていないということが、ひどく心地のよいものだった。
冬に向かって、日に日に風は冷たさを増してゆく。
ここに吹く風は鳴いている。
ごうごうという風の音に混じって、なにものかが泣いている。いつからか、わたしはそう感じるようになっていた。
何度か問い返してみたこともある。あなたはだれ。なにを呼んでいるの。
だれを待っているの。
けれど、応えがかえってきたことは一度もない。

だがそれでも、呼び声はさびしく、だからこそなぐさめられるような気がするのだ。聞くたびに思う。
わたしもだれかを呼びたい。だれか、呼ぶべきあてのない、だれかを。
それはこの国に文字通り閉じ込められている、わたしのさびしさなのかもしれなかった。
「アイリス」
ふと、背後から名を呼ぶ声がした。程よく低い、まだ若く張りのあるその声の主を、短い音でもわたしは決して間違えない。
「アイリス」
分かっていながら返事をしないわたしに、彼はもう一度名を呼んだ。今度は先ほどより近く、ほとんどすぐ後ろから。わたしは綻ぶ口元を隠すように一度きゅっと引き結んで、もったいぶって、少し鬱陶しそうなふりをしつつ声のするほうを振り向いてみせる。
「エル」
「アイリス。迎えに来た、帰ろう」
差し出された手のひらは黒い革に覆われている。風に翻る濃い灰色のマント。肌はほとんど白に近く――とはいえこれはこの国の人ほぼ全員に通じることだけれど――、対照的に瞳は落ち着いて深い灰。彼の目がほんとうはどういう色をしているのか、わたしは知らない。
この国では、すべての色が奪われる。草も木も森も山も空も、人間も。
ただひとり、わたしを除いて。
「もう、今日の仕事は終わったの？」
「ああ」
「嘘つき」
間髪いれず返ってきた答えを、わたしは一蹴した。
「この時期、こんな早くに仕事が終わるわけないでしょう」
抜けてきたのか、と言外になじるわたしに、エル――エルヴェは

いささかも悪びれず、涼しい顔をして言った。
「そうだ。でも、もうじきに日が暮れる。暗くなってしまっては危ない」
「わたしは大丈夫よ、目立つもの。手を出そうとしたって、すぐにばれるわ」
「だとしても危ない。ここのところ人も増えてきているのだし」
「心配性ね」
エルは過保護だ。なにかにつけ危ない、心配だ、やめておけ、そう言う。そうしてエルはいつも、私が過保護なのではない、お前が無鉄砲すぎるのだ、と困ったように眉を下げる。そんな彼が純粋に心配してくれることが分かるから、頑なに拒むこともできない。
そうして結局この日もまた、わたしは彼の手を取るのだ。あたたかな彼の体温に、それでも一抹の空しさを感じながら。
こんな日々が、これからもずっと続いていくのだと思っていた。

Section. 1

「あぁ疲れた」

書類の山がようやっと全部片付いて、わたしは一日中握っていたペンを放り出した。手が盛大にしびれている。

だれも見ていないのをいいことにだらしなく伸びをし、そっとドアのほうをうかがう。物音はしない。つまりたぶん、廊下にはだれもいない。

はやる心をおさえつつインク壷にふたをしペンをしまって、積み上げた書類の上には重石を置いた。そのあともう一度ドアを見遣ってから、足音をしのばせて窓際まで近づく。透明なガラスの向こうで、葉を落としかけた大きな木のこずえが揺れている。ゆらゆらと揺れる細い枝葉に目を向けながら、慎重に、音をたてないように窓を開ける。わたしが日頃仕事をするこの神殿はとても古く、窓もまた相当な年代ものであるのからして、きいきいと耳障りな音を立ててしまうことが少なくなかった。

音をたてて困るのは耳に痛いというほかに、もうひとつワケがある。

隣の部屋には、この部屋に不審を感じようものならすぐに飛び込んでくる迷惑なのが控えているのだ。普段でも小言が多くて鬱陶しい以外のなにものでもないが、今はさらに、もしそうなったならわたしがしようとしていることにたいして大変な障害になってしまう。

……まあ、たとえ見つかっても振り切って逃げるけれど。

うまく見つからず抜け出すのと、逃げ切るのと、確率は半々くらい。どちらにしろ日課である。いつものように開いた窓に足をかけて、わたしは大きく身を乗り出す。

「アイリス、書類取りにきた、……」

「あっ、エル！」

ちょうど窓の一番近くまで伸びていた枝に右手をかけたとき、背

後でドアの開く音がした。驚いた拍子に手が滑りかけて焦り、慌てて掴みなおす。人の気配などしなかったのに、とは遅すぎる後悔だ。エルヴェが気配を消すことに長けたひとであることを、わたしは経験から知っていた。彼がわたしの部屋を訪れるのに、いつもわざとそうすることも。

「まーた何をしているんだお前は」

ノックもなく突然ドアを開けて入ってきたエルは、わたしの格好を見て呆れたように息をついた。いまのわたしは長い神官服の裾がひざ上まで捲れ上がり肌をさらした、長老たちなら卒倒しそうな姿をしている。だが恥ずかしくとも止まっている暇はない。

わたしは服を直すよりもさきに、張り出した木に乗り移った。せっかく頑張って片付けたのに、彼に捕まってしまうなんてごめんだ。

「こら、戻って来い」

「いいえ、だって今日のぶんはもう終わったもの。机の上に積んであるから。ちゃんとみんな目を通したわ、ご心配なく！」

「ちょっと待てアイリス！」

そういう問題じゃない！　と叫んだエルが窓際に駆け寄ってくる足音がしたから、わたしは急いで地面まで降りた。エルは育ちのいいお坊ちゃん、どころか王子さまのくせして、木登りも壁をよじ登るのもためらわない。わたしもひとのことは言えないのだけれど、だから迂闊なことをしているとエルまでわたしを木伝いに追ってくる。

それはお互いの為にもよろしくない。

王太子であるエルに怪我をさせるわけにはいかないし、わたしも捕まるわけにはいかないのだから。

「ちゃんと日暮れまでには戻ってくるから」

「今戻れ、今！」

「じゃあね！」

わたしはひらりと手を振って木から離れた。窓から身を乗り出したエルは、地面に足をつけているわたしを見て追うことはあきらめ

たようだった。懸命な判断だといえよう、わたしは駆けるのがそう遅くない。
怒った顔をしているエルにもう一度、ばいばいと手を振って身を翻すと、神殿の裏手にある小さな木戸から外へ出る。途端、肌に感じる空気が変わった。
高く灰色をした石の塀に囲まれた神殿は厳かで神聖そのものだが、そのぶんどうにもよどんだような空気をしている。わたしはそれが苦手だった。口うるさい老神官もおなじくらい苦手だけれど。
その双方から解放されて気持ちが浮つく。はずむ心に、それでも長めの手袋をはめ、頭から被ったマントの前を合わせる慎重さは忘れられない。肌や髪の露出がないか確認を終えてようやく、うずうずとした期待に耐えかねて駆け出した。
風をきって走る、頬を冷たい空気が撫でてゆく。
神殿の塀沿いにいくと正門あたりで誰かに見つかってしまうので、途中で小道に入りながらいくつかの角を曲がって人の行きかう大通りへ出る。顔をあげると神殿はいくつも連なる屋根たちの向こう、すこし遠くに見えた。ここまで来ればこの人ごみだ、わたしを見つけることはだれにもできない。
解放感から、両腕を空に伸ばして伸びをする。わたしはようやく、だれでもない一人に戻る。
アイリスという名の、ただのわたしに。
冬前の神殿解放を控えて町は活気だっていた。春に一度、夏の盛りに一度、そして冬のはじめに一度。年に三度だけ解放される王都の神殿へ参るために、人々は各地からやってくる。合わせて国の外からも商人やらサーカスやらが集まってくるから、国王が催したわけでなくとも解放日前後の王都はとても賑わうのだ。今日も、昨日に比べて露店の数がぐっと増え、道を行きかう人々も格段に多くなっていた。解放は一週間後、あと数日もすればその数は数倍にもなるだろう。
わたしは、この時期の町が一番好きだった。露店も人々も、わた

しが知ることのできない外のにおいをまとって笑い、喋り、行き交う。露店には普段ならば手に入らないようなものも並ぶ。中にはガラクタに見えるのもあるけれど、そのすべてが、狭い世界に生きるしかないわたしにとっては心惹かれるものなのだ。

心なしかいつもと違う気がする風を感じながら、わたしは外套が翻らないよう気をつけつつ雑踏を歩いた。ときにはいくつかの露店に寄って店主と話をしてみたり、手ごろな値段で細かいものを買ってみたり。行商をしている主人の話はいつも面白く、時季ごとに何度も訪れる人もいるから、なかにはちょっとした顔見知りもいたりする。そんな彼らの旅物話を聞くごとに、わたしは外への思いを募らせた。

決して、かなわない夢ではあるけれど。

だから胸が高鳴るほどの高揚と一抹のさみしさをあわせて、この時期わたしの心中はいつもよりすこしばかり感傷的になる。けれどそんな変化もあわせて、それでもわたしはこの季節をいっとう愛していた。

＊＊＊

吸い寄せられるように立ち寄った古物を扱う店にはさまざまわたしの興味をひくものが並んでいて、そのなかから、わたしは一葉の地図を選んだ。描かれたかたちには見覚えがなく、古いものかと思ったが紙自体はわりと新しい。どこのものなのかは店のあるじに訊いてみたけれど分からなかった。彼は共通語を話していたようだけれども、なまりがひどくて聞き取れなかったのだ。わたしの母語はこの国の言葉でなく、彼が話したと思しきものと同じ大陸の共通語

だというのに、それでもだめだった。いったいどこから来たひとだったのだろう。
そうやってしばらく通りをそぞろ歩いたあと、わたしはいつもの丘にのぼった。丘の上から町を見下ろすと、いつもより人も物もとても多くて、ひどく雑多な景色が見える。でも、反対側に目を向ければそこはいつもと同じ。
冬に向けて色を落とした草波が、ひんやりとしてきた風にさわさわ吹かれて揺れている。
あたりに人がいないことを確認して、わたしは頭を覆うフードを外した。
「……ふぅ」
熱の籠り始めていた頭に風が通る。少し冷たい風も、今は涼しくて気持ちいい。
裾を払って草の上に直に腰を下ろし、先ほど買ったばかりの地図を取り出して広げてみると、渋皮の色をしたそれはますます神秘的なものに見えた。見たことも聞いたこともない地名、国や島のかたち。綴りにも読めないものが少なからずあり、文字は同じでも言葉がちがうのだろうかと思いを馳せるのは楽しかった。
立てた膝に地図を置いて、片方の指で文字をたどる。ふいに、見覚えのある地名が飛び込んできてわたしは思わず動きを止めた。
「”Ｅｓｐｅｒｉａ”……」
口に出して呟く。エスペリア。音を、風が攫う。
「遠い昔に栄えた、王国の名だね」
わたしは、吹いてきた風に地図を押さえることも忘れて振り返った。一枚の紙がふわりと舞って彼の足元へと飛んでゆく。
「こんにちは、神子姫さま」
流れるような動作で飛んできた地図を拾い上げた旅装の青年は、そう、まぶしそうにふわりと笑った。

Section. 2

笑った、というのは、実はわたしがそう思っただけで、青年の表情が実際に見えたわけではなかった。なぜなら青年が、顔どころか口元まですっぽり覆ってしまうほど目深にフードをかぶっていたからだ。黒に近い、おそらくとても濃い色をしているのだろうマントに続くフードをかぶった青年の顔は黒々とした影の向こうに隠され、いかにも不審そうに見える。青年というのさえも実を言えば上背と声音から判断したにすぎない。だというのに、わたしはほとんど恐怖心を抱かなかった。

彼の声がとても柔らかで、まるで歌うようにさえ聞こえるほど耳触りのよいものだったからかも、あるいは地図を拾って差し出す所作がとても美しかったからかもしれない。

とにもかくにも、微笑みの錯覚をするほどには、わたしは彼のまとう雰囲気に絆されていた。

はい、と差し出された地図をなんのためらいもなく手を伸ばして受け取る。

「あ、ありがとう……」

「いいえ。これどうしたの？　ずいぶん古い時代のものだけれど」

「えっ」

わたしは面食らった。それは地図に関することでもあったけれど、それ以上に、その態度に、だ。

わたしに、こんな話し方をするひとはほとんどいない。おまけに彼はわたしの手元に戻った地図をひょいと上体をかがめて覗き込んだ、その動作もごく自然で、まるで古くからの知り合いみたいに気兼ねがない。

「あ、ええと――失礼しました？」

思わずぽかんと口を開けて固まるわたしを見て、彼は、しまった、というよりはやや気まずそうに肩をすくめる。意外にも（と、言え

ば失礼なのかもしれないが）使い慣れたふうである敬語に口調が変わったところで、わたしははっと我に返って即座に首を振った。
「いいえ、いいえ、ごめんなさい、ちょっとびっくりしただけなの。あの、わたしにそういうふうに話しかけてくれるひとって、なかなかいないから。それで、あの」
「では、このままで構わない？」
……あ。
まただ、と思った。しどろもどろになりかけるわたしを導くようにやんわりさえぎった彼はまた、あの“ほほ笑んだ雰囲気”をまとってフードの奥からわたしをじっと見つめていた。ように感じた。
青年の空気に呑まれそうになりながらも、わたしはこくりとうなずいて返事をする。
「そのほうがいいの」
短く、きっぱりと告げたわたしの返答はどんなふうに受け取られただろう。
人々にこのうえなく崇められる高貴な神子の、意外にも気さくな一面だろうか。でも、ほんとうはただ、わたしのわがままだ。
「よかった。僕も、まわりくどい話し方は好きでないんだ。かの神子姫どのに会えたら話してみたいことがたくさんあったのに、いちいち気を使わなければならないのかと思ったら面倒で」
そのわりには、はじめから気安く話しかけてきた気がする。そう思ったが、わたしはひとまずその突っ込みを脇に置いて、それよりも抱いた疑問をぶつけてみた。
「でも、なぜわたしがここにいると分かったの？」
「その髪も肌の色も、この景色のなかでは遠目からでも目立つもの。遠くからあなたの姿を見て、ああ、あのひとがそうなんだってすぐ分かったよ」
「……そんなに遠くから、わたしが見えたかしら」
「うん、あとは“風のたより”ってやつかな……」
「風のたより……」

なんだか釈然としない。けれども青年のほうにはそれ以上説明する気はないようで、じっとフードの奥を見つめてみてもどこかつかみどころのない空気が漂ってくるだけだった。
彼は、わたしの見つめる先で吹いてきた風にマントの裾を軽やかに翻して、ふっと視線を宙に逸らす。なんだろう、とわたしが思わず追いかけていたところで、軽い音をたてて青年はわたしの隣の草むらに腰を下ろした。
「えっ」
「どうしたの？」
「え、いいえ……」
だれも、そう、ここではあのエルでさえやったことのないその行為に、わたしはちょっと驚いた。エルは迎えに来てはくれるけれど、ここでなにかを語らうことなんてないから。
「ここ、けっこういい眺めだね」
「ええ。わたし、この国でいちばんここが好きなの」
「その気持ちは分かるかもしれない。はじめは驚きばかりで興味深かったけれど、慣れるとさみしいものね、この国の景色は」
「うん」
慣れる――そうか、慣れる、か。
わたしは、彼の言ったその一言を胸のうちで繰り返した。はじめからそう収まるべきであったかのように、その言葉は妙にすこんと心に落ちる。
いつのまにか、わたしにとってこの景色が当たり前になりすぎていた。生まれてから生きてきた年数のなかでは三分の一に満たない時しか過ごしていないというのに、この墨色は、あっという間にわたしの心の中まで流れ込んできていた。
そのことがなにより、きっとわたしは、さみしい。
この色に染まりたくない。
ひとり目立つ自分の色を厭うのと同じくらい強く、わたしはそう思っていたはずなのに。

視線を落とすと、風に舞い遊ぶわたしの長い髪が目に入る。それは、この国でありふれた灰色ではなくて、しっかりと、たしかな金の色をしていた。
金の髪、緑の目。紅のくちびる、はちみつを溶かし込んだミルク色の肌。
この墨色の国にあってわたしだけがゆいいつ持ち合わせた、鮮やかな色彩。毎日、それこそいつでも視界の隅をかすめていたかれらがこのとき、いっそうの鮮烈さでもってわたしの目を射た。
「あなたの目は、とてもきれいな色をしている」
わたしが色に思いを馳せた、まさにそのタイミングで告げられた言葉はまっすぐわたしの胸に染みた。一呼吸遅れて、褒められた嬉しさと気恥ずかしさがやってくる。
「ありがとう……この目の色は、母譲りなの。お母さんがいつもわたしの目を見て、この色は私のものねって……言ってた……」
途中で歯切れ悪くなったのは、初対面の、それも顔も分からないような男に饒舌になりすぎていたような気がしたからだ。こんなことを話したのは、この国に来てはじめてかもしれない。でももしかして、この程度は普通なのだろうか。そんな判断もわたしにはまったくつかなかった。
ただ青年は、内心困惑するわたしに対して、笑ったり引いたりはしなかった。変わらず、穏やかな空気が漂ってくる。
「母君も緑の目をしていらしたんだね」
「うん。……」
だめだ、意識をすると会話が続かない。幼いころはそうでもなかったはずなのに、わたしはいつからこんなにも、ひとと接することがへたくそになっていたのだろう。
「髪は？」
「あ、髪は父譲り。……って言っても、実際に見たことはないんだけど……。母が、そう言っていたの。いつも、わたしの髪を撫でながら……」

直接は口にしなかったけれど、わたしの父がすでに亡きひとであるということはきっと伝わったのだろう、青年とのあいだに少し強張った空気が流れる。わたしは、それをどうしてよいのか分からずに、黙り込むことしかできなかった。

風が吹く。でも、さわやかなそれもわたしと彼との間にあるものをさらっていってくれることはしなかった。

固まるばかりのわたしに、その澱を流してくれたのもやはり、青年だった。

「そう……。あなたの髪は、秋に揺れる小麦畑に似ているよ。知ってる？　この国の南にある、王国の有名な田園地帯」

噂には聞いたことがある。粉をひく赤い屋根の風車と、広がる麦畑の景色がとても美しいのだという。見たことはなかったから、わたしは首を横に振った。

「僕はそこを通ってこの国まで来たんだ。ちょうどよい季節で、本当に美しかった。今頃は収穫を終えているのだろうな。描いた絵を持っているけど……」

「ううん、見てみたい。たとえ色は分からなくっても、それでも」

青年は、一瞬だけおどろいたようにわたしを見た。ように感じた。表情そのものは相変わらずフードの下に隠されていて見えない。風にそよぎはしても絶対に浮き上がることのないそれの下で、彼がどんな顔をしているのか――不思議なことに、おおまかな感情は顔を見なくても伝わってくるのだけれど、このときからわたしはだんだんと、彼の顔が見えないことをもどかしく思うようになっていった。

それでも、言葉にはできないまま青年の手元を見やる。彼はマントの合わせ目に手を突っ込んで、折りたたまれた一枚の紙を取り出した。

「わあ……」

繊細な筆致で描かれた、風になびく小麦の穂、煉瓦屋根の大きな風車。空はきっと濁りなく晴れ渡っているのだろう。そして小麦畑のあいなかにぽつんと、こちらに背を向けてひとりの人が立ってい

る。広がる景色を眺めているようなそのひとは、肩にかからないくらいのやわらかそうな髪をふわりと風に流して、風景のなかによく馴染んでいた。
　これは、もしかして。
「これはあなた？」
　指差すと、青年はやや気恥ずかしそうな声音でうなずいた。
「うん、そう。この絵を描いた画家がね……ほんとうは、隣にイーゼルを立ててちゃんとした油絵を描いていたのに、いつのまにかスケッチブックに描いていて。せっかくだから持って行けとくれたんだ。色がとても綺麗だから、見せられないのが残念だな」
「そうね、ちゃんと、色つきのこの絵を見てみたかったわ……。でも、このままでもとても綺麗」
　揺れる麦畑がさざ波のように揺らめいて、陽光に煌めく。描かれているのはまさにそんな一瞬だ。本物は、さぞかし見事なのだろう。
　自分には決して見られないことを寂しく思いながらも、慣れた感情であったから、わたしはきちんと浮かび上がるまえに胸の奥深くへと沈めてしまえた。それよりも、目の前にある絵を見て感嘆のため息をこぼす。このままでも綺麗だと言ったのは決して嘘ではない。
　そんなわたしを見て青年がなにを思っていたのかは、知るよしもなかった。

Section. 3

「アイリス」
うしろから驚きを多分に含んだその声で呼び止められたとき、わたしの心臓はわけもなくどきりと跳ねた。聞き間違えるはずのない、ここ数年の間でならばもっともよく聞いた声。そのあるじともども今では馴染んでいるはずのそれに、落ち着かなさを覚えるのは久しぶりだ。
「エル……」
動揺が滲まないよう強ばった喉をどうにかほぐして、わたしは振り返る。居住区と執務空間をわける廊下の向こうに、声音通り意外そうな顔をしたエルヴェがいた。
王太子として執務にはげんでいる時間に彼が居住区まで戻ってくることは少ない。手元に何もたずさえていないところを見ると、今日のぶんの仕事はもう終わったということだろうか。いいやまさか。浮かんだ考えをわたしはすぐに打ち消した。今は特に忙しい時期だ。さらに今の時間は、普段エルが丘へ迎えに来るより早い。部屋に帰ってきたというよりも、居住区に用があったのだと考える方が自然である。
「どうしたの？」
首を傾げながら尋ねると、エルはどこか憮然とした表情になってわたしのすぐそばで立ち止まった。
「アイリスが帰ってきたと聞いたから」
「えっ……誰に？」
「門兵。日が落ちるのも早くなってきたし、いつもより早めに迎えに行こうと思っていたら、城を出るところで教わった。どうしたんだ？」
彼の用事は、どうやらわたしのことだったらしい。わたしが、普段よりもずっと早い時間、自分から帰ってきたことに何らかの疑念、

あるいは憂いを覚えたのだろう。そんな些細なことを気にかけるほど、たしかに彼は常々、少々窮屈なくらいにわたしのことを心配して、なにくれとなく気をまわしてくれている。だがそれは、いまとても都合が悪い。

帰ってこいとどんなに促してもちっとも聞かないのがわたしの常なのだから、彼が疑いを抱くのも分かる。いつもとは真逆といえるこの状況にエルはいたく訝しげで、一方その探るような視線にわたしは内心とてもたじろいでいた。

やましいことはないはずだけれど、やはりどこか後ろめたい気持ちがあるからか。それでも悟られるわけにはいかないと、わたしは必死に平静さを装った。

「別に、どうもしてないけど。なんとなくよ」

われながらごく普通の言い分だろうと思ったものの、数年ともに過ごした仲というのは厄介だ。特に、わたしがまだあまり取り繕うことなく無邪気であった頃を知っているぶん、エルの疑わしげな眼差しはますます強まってしまっただけだった。そう。わたしの反発心を、彼はよく知っている。

「な、わけあるか。この時期のおまえは輪をかけて外に居たがるだろう。それが『なんとなく』なんて理由で自主的に帰ってくるなんて絶対に無い」

なんという言われよう。でも事実だから強い反論もできない。だからといって肯定することもできないので、わたしは控えめに言い返した。

「いいじゃない、ごくたまに、そういうことがあったって」

「具合でも悪いのか？」

「いいえ」

エルの眼差しが和らいで、けれど気遣わしげな顔をされるのは居心地の悪いものだった。わたしがこんな時間に帰ってきた理由は、ひとえにあの青年にある。しばらく話をして、ともに茜色に染まってゆく空を見ているうちに彼が城まで送ると言い出したのだ。一緒

に居るところを誰かに見られたらという懸念とまだ早い時間であることから断ったのだが、前者は大丈夫だと、後者はそれでももう暗くなるからと、そう言って彼は譲らなかった。

押し切られるかたちで結局、わたしは彼と城の前の広場まで一緒に歩いて、人混みへと紛れられるうちに別れた。いいや、『別れた』というよりあれは彼が消えたのに近い。思い出して、わたしは宙に目を細める。

人のゆきかう流れのなかで、ほんの一瞬、視線をあわせて。そのやりとりだけでそっと互いの距離を空け、わたしが城に向かって一歩踏み出しながらふと振り返ってみたときにはもう、彼の姿はきれいさっぱり消え去っていた。どんなに目を凝らしても、まだ目視できる距離にいるはずの彼を見つけることはできなかった。

彼は、まるで霞か幻かのように消えてみせた。気配ひとつ残さずに。

全身を覆う暗いマントという、この時期どこにでも見られる格好だったのも一役買ったのかもしれない、だがそれにしてもあまりに見事な消え方にわたしは、もしかして彼の存在自体幻だったのではないかとあらぬ疑念さえ抱きかけたのだ。

落ち着いた今なら、さすがにそれはないと言える。彼はたしかに存在していて、そうしてあの丘でわたしと出会った。どこまでも不思議で、神秘的な空気を纏った青年。

いまだその素顔も、名前さえも知らないまま。

名を聞くことさえできなかったことを思うと、すっと胸の奥が冷えるような心地がする。本来なら、あんなふうに親しく言葉を交わした相手ならば、名乗り合うのが初歩的な礼儀のはずだ。それなのにそんなことさえできなかったわたしは、こうして王太子の婚約者として、あるいは神殿の神子として振る舞うことが当たり前になってしまって、相手に名を尋ねることさえ忘れかけていたのではないか、と。今の立場では、相手は名乗らずともわたしの名を知っていて——否、わたしの名を知っている必要などなくて、そうしてわた

しのほうから訊かずともかれらが名乗るのが礼儀とされていた。それを当たり前と、基本的な立ち居振る舞いのなかに身につけてしまっていないか。そう考えるととても恐ろしい。
単純に、うまく機会を掴めなかっただけなのだと思いたい。
「アイリス」
彼のことを思い出して現実をおろそかにしていたら、やや低くなった声のエルに呼ばれてわたしははっと我に返る。まずい、かもしれない。不機嫌さを含む声を聞くに、確実にエルの疑念は増している。
「ほんとうに、大丈夫よ。どうしたのかって問われても、言えるようなことなんてなかったわ」
「言えないことがあったのか」
「そうじゃなくて」
頑ななエルにわたしが焦れて眉を寄せると、それを見たエルはその濃い瞳でわたしをまっすぐに射抜きながら、少し重さを変えて口を開いた。
「本当に、なにもなかったんだな」
「……ええ」
「なら、いい」
答えのまえにほんのわずか喉に引っかかった沈黙を、彼は不自然と思わなかっただろうか。そうであるとよいのだけれど。
ようやっと追及をやめてくれたらしい様子にわたしがほっと息をつくと、エルは同じ、真剣な顔をしたまま警告する。
「なんにせよ早く帰ってくるのは良いことだ。この時期、どんな奴が入り込んできているか分からない。気をつけろ」
「分かっているわ」
「お前の身は、お前ひとりのものではないのだから」
「……分かってる」
一瞬だけ、呼吸がとても苦しくなって、息が詰まった。
彼の言葉は、聞き流しただけでは婚約者の身を心配してくれてい

る優しい台詞と言えるのだろう。けれども、全くそうでないことをわたしは自分の立場をもって嫌と言うほど知らされている。

わたしは、わたしのものではなく国のもの。

本当は、束の間の自由を許されていることでさえ極めて特別なことなのだと、言外に彼は告げる。突き付けられるたび、胸に冷たい鉛のような重さを感じる。そんなことはないのだと大声で叫びたい。叫んでもそれが無意味だと分かっているから苦しい。

真実を思い出すことさえしなければ、婚約者に甘やかされて、それなりに尊重されて、多少息苦しいことはあってもそれなりの幸福を享受できるのかもしれないけれど。そのことをエルも承知しているから、これは行き過ぎるなとの警告だ。

わたしは呼吸を殺すようにしてそれに耐えた。エルはわたしの行動に釘をさしただけで、あの青年のことまでを悟ったわけではないだろう。彼とのことは、まだわたしだけのもの。彼を思うと、凍りついたような胸が少しだけほどけてくれる。

つい先ほどぎくりとさせられたその存在、その秘密が、わたしの胸の中でいつしか砦のようになってゆくのを、わたしはゆっくりと感じていた。

知られてはいけない――知られたくない。だれにも。“わたし”を知る、あの青年以外の誰にも。

見つめてくるエルヴェの眼差しに負けじと視線を返しながらも、わたしはその奥に秘めごとを隠す。見透かされないよう、精一杯の虚勢で覆って。

ささやかな反抗心から芽生えたようなそれがけれども、いつのまにかかけがえのない灯火となってわたしの心を温めてくれるようになってゆくことを、わたしはこのときすでに感じていたのかもしれない。

Section. 4

翌日の夕方も、わたしは丘の上に居た。
日課だからといってしまえばそれまでだが、この日ばかりはそこに一抹以上の期待が溶けていたことを否めない。
はやる心に気づかないふりをしつつ、わたしはしばらくのあいだ、丘から賑わう街を眺めていた。視線をずらせば、街の外側に広がる収穫を終えたばかりの田畑を一望できる。
この国は、とても豊かだ。
決してよい条件を持たないはずの小さな山あいの国が、実り豊かな土壌とめぐまれた気候をもつ。ゆえに食糧の心配もなく、領土のわりに人口も多い。
他国からの侵略という面では辺境で、また山に囲まれているということがさいわいして軍隊の進行をはばむため、建国以来大きな戦争に巻き込まれたこともないらしい。国同士の小競り合いが一段落して各国の領域が定まってきた近年では護るばかりでなく山を切り開いて交易路をもうけたことで、人やモノの行き来が活発になり、他国の文物が多く入ってくるようになっている。
まるで奇跡のような国。
そのあまりにも恵まれすぎた条件に、それゆえ、この国では神の加護というものがことさら強く信じられていた。
色彩をひきかえに、約束されためぐみをもたらしてくれるもの。
この国の不思議なからくりについて堂々とそう謳われているわけではないのだが、みなそう信じ、その信仰もあつく、だからこそ中央神殿の開放日には国中から人が集まって街もにぎわう。
この国は、たしかに幸福な繁栄を謳歌しているといえるのだろう。
唯一欠けているのが今、わたしの見ているすべてを本来彩っているはずの色彩だけれど、これだけ満ち足りていればそれを気にするものはほとんどいない。

それに、国から一歩外へ踏み出せば、それは世界にあふれている。
――決して、人々に届かないものでもない。
「たったひとりを除けば、ね……」
知らず下がっていたまぶたを上げれば、街並のなか白亜の教会が陽光を弾いて、他を寄せ付けない厳格さでそびえたっていた。潔癖の白だ。影の濃い黒が、その白をヒトの目によりいっそう白く見せている。
そうして今でこそ強烈に白く見えている夕陽の、本当の色は茜。
数年前なら、わたしは当たり前のようにひときわ眩しい黄昏の陽光を見ていた。まだ、そうだったことを忘れるほどの時は経っていない。
けれど記憶から抜き出して脳裏に浮かべた光景はどこか色が褪せたよう。
記憶が記憶であるかぎり、それも仕方のないことなのだろう。ひとは思い出せる景色のうち色を一番初めに忘れてゆくのだと、教えてくれたのは母だっただろうか。
「おかあさん」
昔のように呼べば、数年経った今でも簡単にその面影がよみがえる。
優しく微笑む母はまだ消えてはいない。でも、その声はもうはっきりと聞こえてはこなかった。
こうして少しずつ忘れていってしまうのではないかと、わたしにはそれがとてつもなく恐ろしい。
「大丈夫……まだ、ちゃんと憶えてる」
記憶を追うように目を閉じ、つぶやく。
ひとりきりのときの自分へ声に出して聞かせるというのは、なかなか案外落ち着くものだ。
喉が震えたのには気づかなかったふりをした。
「思い出を、留めるのは難しいものだね」
「！」

感傷に浸っていると、突然、すぐ近くで声がした。まるで、ずっとそこにたたずんでいたのだと思えるほど自然に、けれど直前までひとの気配などわたしは感じていなかったのに。
ぱっと目を開けると目の前にフードをかぶったシルエットが立っていて、その近さにわたしは二度も驚く羽目になる。
「驚かせた？　すまない」
そんなわたしに、『彼』は軽く小首を傾げて謝った。
穏やかなばかりで悪びれたところのない声音は、相変わらずフードの奥から発せられている。この近さにあっても輪郭さえ見せない黒々とした濃い影は不気味なものであるはずなのに、彼に限ってはやっぱり警戒心など起らなかった。
不意打ちにひどく驚いただけだ。
「本当に大丈夫かしら、わたし」
「なにが？」
「いいえ、何でも」
わたしは軽く嘆息して首を振った。「あなたには警戒心がわかないの」などと、どんな顔をして言えばよいというのか。
少なくとも、そんなことを知り合ったばかりの他人に言う度胸は、わたしにはない。
「それより……そう、わたし、今度あなたに会ったら聞きたいことがあったの」
「おや。奇遇だね。僕もだ」
「あら。でも、忘れないうちに先に聞いてもいい？　あなた、名前はなんていうの？」
「名前？」
きょとんと、どこかとぼけたような気配がしたのを、わたしはなんだか意外に思った。おまけに彼が鸚鵡返しに繰り返した言葉は「どうしてそんなことが知りたいんだ」とでも言いたげな音の上がりかた。
名を知りたいというのは、そんなにおかしなことだったろうか。

けれど逆にわたしが面食らって目を丸くしていると、彼はすぐにあののんびりとした雰囲気を取り戻して微笑んだ――ような空気を漂わせた。
「ああ……僕は、セラ」
「セラ？」
「うん。本当は、セイラ＝イール・アルヴァレスっていうのだけど、ファーストネームが女の子の名前だから、そう名乗って呼んでもらうことにしているんだ」
「なぜ女の子の名前がつけられたの？」
「うちの家系の、古い習慣らしいよ」
セラは、その点に関して多くを語るつもりはないようだった。言葉の終わりまで丁寧に述べて、そこからは黙って佇んでいる。
引っかかりを覚えながらも突っ込む勇気などなく、わたしはただうなずいた。
「そうなの。わたしは、アイリス。残念ながらファミリーネームは知らないのよ。どうぞよろしく、セラ」
言って右手を差し出すと、ためらいもなく握り返される。黒い皮手袋越しの、しっかりした男のひとの手のひらを感じた。
雰囲気のせいかゆったりしたローブのシルエットのせいか、エルヴェと比べればどこか頼りなくさえ見えるのに、彼はやっぱり男のひとなのだ。
もっとも、剣士としても訓練を受けているエルヴェと比べるのがそもそもの間違いであったかもしれないが。
「ええと、それで……セラが訊きたいことってなあに？」
セラは、フードの下でにっこり笑ったようだった。
「きみのことだよ」
「わたしの？」
「昨日はあまり聞けなかったから。僕は答えてばかりだったしね」
それはわたしが矢継ぎ早にあれこれと質問をしたせいだ。
嬉しくて興奮していたせいとはいえ、わたしは少しばかり恥ずか

しくなってうつむいた。
「ご、ごめんなさい」
「いいんだ。僕はそれで楽しかった。でも、きみのことも知りたい」
「……」
わたしは、束の間だけ絶句した。
『きみのことを知りたい』と、至極ストレートな言葉はそのままの真っ直ぐさでわたしの心臓を直撃した。
まったく、予想だにしない衝撃だった。
うろたえたあまりわたしは頬が火照ったのがばれないかしら、と咄嗟にしては珍妙な心配をし、そういえばこの国では色なんか分からないわね、と安堵した次の瞬間には自分が例外であったことを思い出してさらに赤面しそうになる。
「……いいわよ、答えられることなら、なんでも答えるわ」
そんな動揺をすべて押し殺して浮かべた笑顔は、どこか引きつっていたかもしれない。
なんという言葉でもないような気がするのに、響く。
街を眺めて突っ立っていたわたしは、それに背を向けて草波のうえに腰を下ろした。ならうようにセラも、長いマントを器用にさばいて隣に座る。
風を遮られたせいか、触れあうような距離ではないのに、ほんのりと体温のあたたかさが感じられるような気がした。
先の衝撃が抜けきれないまま、心が少しだけ波立つ。
「なんでも答えるって言ったけれど、わたしそんなに話せることはないかも」
「そんなことはないよ」
昨日、彼にあれやこれやと尋ねたことを思い出し、わたしは少しばかり気後れをしていた。
わたしからしてみれば驚くほどたくさんのことを見聞きしてきたセラに、なにを話せばいいのかなんてわからない。知りたいと言ってくれたのをがっかりさせるのは嫌なのに。

そんなわたしへ、セラはくすりと笑みをもらした。
「誕生日は？」
「……え？」
「誕生日だよ。アイリス、生まれたのはいつ？」
「ええっと」
意表をつく問いかけで、わたしは身構えたぶんすっかり混乱してしまった。
たかだか誕生日ごときで脳内を探し回らなければならなくなったわたしを見て、セラはまた小さく笑う。そんな彼への羞恥と軽い怒りで、わたしはようやっと落ち着きを取り戻す。
「どうして笑うのよ」
「ごめん、きみがあまりにも慌てるから」
「慌てたのじゃないわ、びっくりしたの。まさかそんなこと訊かれるなんて、思ってもみないじゃない」
「そうかな。ふつうの質問だと思うけど」
「普通すぎておかしい」
あんな状況で、だれがこのわたしに誕生日など尋ねると思うのだ。
そもそもわたしには、生まれてこのかた誕生日を訊かれたような記憶がほとんどない。
だがそれをセラに告げると、彼はとても意外そうに目を丸くした。
「そうなの？　誕生日って、普通わりと訊かれやすいことじゃないかな」
「いつ、どんなところで？」
「学校とか」
セラの答えを聞いて、わたしはなるほどと納得した。
「わたし、学校に通ったことないもの」
「えっ、……そうなんだ」
「物心ついて以来、ずっと母と旅暮らしだったわ。生まれる前……というか、本当にわたしが生まれてすぐ亡くなった父と、一緒に大陸を回っていたみたい」

「……そう」
相槌をうつセラの声が、やや平坦に沈んだ。ほんの少しだけ硬くひやりと。
変化はささいなものだったから、普通なら気づかなかったかもしれない。
けれど今は声音と雰囲気しか彼をうかがうすべがないので、自然とわたしの感覚も鋭くなっていたのだ。
ただ、それが明らかなものではないために、わたしは『何故』を訊くことができなかった。
なにが琴線にふれるのか、知るのは難しい。
でも分かるようになりたいと――彼がわたしに言ったように、わたしも彼のことを知りたいと、このときわたしは、とても強くそう思った。
知らねばならないと思うことは多かれど、知りたいと思うのは久しぶりだった。
「ではきみも、いろんな国を見てきたんだ」
「そう、なるのかしら。あなたほどじゃないかもしれないけれど」
「生まれたときから旅暮らしなら、きみのほうが多いはずだ。僕はかなり西をふらふらしていたから、あちこち回ってたきみとルートが違うんだよ」
「そうなの？」
西から東の果てであるここへ来たということは、まっすぐこの国を目指したということなのだろうか。たしかに、この国の不可思議な光景を一目見てみたいと望むものは少なくないと聞く。
尋ねると、セラはうなずいた。
「故郷を出たのは五年も前なのだけどね。そのあとも西のほうを回っていたから。二年前にこの国のことを聞いて、それで来たんだ」
「二年って、相当急いだのね」
「まあね」
西の端からここまで、馬の足を使っても一年と少しかかるという。

それを徒歩で二年ならかなりの早さだ。
「そんなにこの国を見てみたかったの？」
「うん」
「実際に来て、なにか期待しただけの収穫はあった？」
「……。そうだね。とりあえず、興味はあるな。とても」
この国に来て、この光景に興味を持つ人間はたしかに多い。けれどわたしは彼のそれに、今まで同じことを言っていた人たちとは違う何かを感じた。
だが気になってじっと彼を見上げても、わたしに見えるのは黒いフードだけ。
その下から、彼には何が見えているのだろう。
前を向いて遠くを見つめているようなセラから目を逸らせない。
そうしていたら不意に彼がふっと振り返ったので、わたしはどきりとして目を伏せた。直後に、これでは余計怪しいことに気づく。
じっと見つめていた手前弁解のしようもないのだが、それでも何か言わなければと焦燥感に駆られて顔を上げると、けれどセラはわたしたちの背後に目をやっていた。
「どうしたの？」
「……いや……すまない、アイリス。少し用事を思い出したから、もう行かないと。今日は城まで送ってあげられなさそうだ」
「えっ……いえ、それは構わないけれど。行くって……」
「宿に帰るだけだよ。また明日、僕はここに来る」
その言葉に、わたしはほっと胸を撫で下ろした。
また、明日。明日があるなら、また会える。
「そうなの……。うん、わたしもまた明日、ここに居るわ」
「ありがとう」
手早くマントを整えていたセラは、わたしを見下ろしてちょっとほほ笑んだ気配を寄越した。
けれどどうやら相当急ぎたかったようで、それから早口に「本当にごめん」と言い残すと、あわただしく丘を下りていく。

わたしは立ちあがって、完全に見えなくなってしまうまで後姿を見送っていた。
不思議なことに、彼の姿はほかの人よりわたしの目には、少し目立って見えるようだった。豆粒のような街の、雑踏のなかに入り込んでももうしばらくだけ、わたしは彼を追うことができた。
やがてそれも見失ってしまって、わたしは小さく息をつく。
足元の影がだいぶ伸びていて、陽もかなり傾いてきている。もうじき日没だろう。
こうして一人夕焼けを見るのが日課だったはずなのに、今日はなんだか寂しさを感じるから不思議だ。
これから改めて何をする気にもなれず、俯いたままなんとなく斜面に伸びた黒い自分の影を追ってみる。そうして、ふとその先の人影に気がついた。
遠目にも上等な服装に、長身のからだ。
「エル？」
まだ、彼が来るには少し早い時間であるはずなのだけど。でも見間違えることはない。
斜面を登っていたエルヴェが顔を上げ、わたしを見上げてほほ笑む。迎えに来た、とその唇が動くのを見て取って、わたしは我ながら珍しくも素直に、彼に向かって斜面を下りて行った。
「ただいま」
「えっ」
いつもと違うわたしの態度に、エルヴェが目を丸くするのが妙に可笑しい。寂しいと感じたことを吹き飛ばすように、わたしはけらけらと笑った。
「どうしたんだ？　アイリス」
「いいえ、なんでも」
訝しげな彼を放って、ゆるやかな斜面に助けられながら軽やかに駆けてみる。つい先ほど、セラが急いで帰って行った道だ。
セラの宿がどこかは知らないが、これからわたしが帰る道の先に

は王宮しかない。
いつもの道。
けれどほんの少しだけ、見知らぬどこかへ繋がってもくれるような気が、していた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0616j/

アナザー・スカイ

2011年12月28日03時45分発行